



TITLE:

京大広報 No. 380

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 380. 京大広報 1989, 380: 809-818

ISSUE DATE:

1989-11-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209297>

RIGHT:

京大広報

No. 380

京都大学広報委員会



本学能楽鑑賞会で演じられる能「国栖」の一場面 ー関連記事本文 816 ページー

目次

<大学の動き>

京都大学市民講座「はな」講演要旨(その1) ... 810

<栄誉>

宮崎市定名誉教授、満田久輝名誉教授が
文化功労者に選ばれる ... 811

<部局の動き>

公開講座

木材研究所・農学部
「木の文化と科学—木を楽しむ—」 ... 813

医学部附属病院

「心臓病長生き講座」 ... 813

<紹介>

工学部航空工学教室 ... 814

学術講演会の開催 ... 816

能楽鑑賞会の開催 ... 816

写真集企画委員会からのお願い ... 817

日誌 ... 818

＜大学の動き＞

京都大学市民講座「はな」講演要旨（その1）

花を育てる

農学部教授 浅 平 端

わが国で現在消費量の多い三つの切り花は、多い方から順にキク、カーネーション、バラであって、世界の先進国といわれるほとんどの国でも、順序はともかく、三大花卉はこの3種である。もちろんこれらの花の美しさが好まれるのであるが、もう一つ大きな理由は、これらの花が年中開花して、いつでも多くの人の需要に応じられることである。これは、花を作り育てる人達の長い間の努力の結果である。

カーネーションとバラは代表的な西洋花卉と考えられているが、前世紀に中国からそれぞれの四季咲き性の遺伝子がヨーロッパに導入された後に、現在のように周年開花するカーネーションやバラが育種された。一方キクは、秋に日が短くなると咲く性質のあることが知られて、人為的に日長を調節して望ましい時期にいつでも咲かすことができるようになった。このように、いろいろの遺伝子の発見と導入や植物の生理生態の解明が、



洋ラン（デンドロビウム・ファレノプシス）の切花栽培

（組織培養によって栄養系が大量に増殖できるようになって、均質の切り花の大量生産が可能となった。）

現在の多彩な花の世界を創出してきた。

洋ランが今では大衆的な花となってきた。洋ランは交雑がくり返されてきているため、種子繁殖するといろいろな性質の株が生まれてくる。美しい花を大量に計画的に生産するには、同じ性質をもった育てやすい株をたくさん殖やす必要がある。ランの一部の組織を切り取り、試験管の中で栄養を与えながら無菌的に培養すると、その組織から母植物と同じ性質の幼植物が数多く生長してくる。この組織培養による繁殖は、これまでの株分けにくらべて、極めて増殖率の高い栄養繁殖法である。このような組織培養がバイオテクノロジーの基本的技術の一つとなっている。また、株分けやさし木などの栄養繁殖法で殖やされる植物は、一度ウイルスに侵されると回復することはなく、生長が次第におとろえ、重要な種類が絶滅に瀕することもある。今では、罹病した植物の特定の組織を培養することで、健全な植物を育成することも可能となっている。カーネーションなどの苗は今はほとんどこの方法で作られている。

インテリアとしての花鉢物の利用が増加している。鉢物では鉢の大きさと草姿の調和が観賞する上で重要である。草たけが伸びるのは植物ホルモンであるジベレリンの作用による。一方、ジベレリンの生合成を抑制して草たけを低くする化学物質ができており、これを使用して草姿の調節がはかられている。

切り花が国際的に流通する時代となっている。航空輸送が行われるためである。それにともなう、切り花の鮮度を長く保つ必要が生じている。エチレンは植物を成熟老化させるホルモンである。切り花でもエチレンの発生が花の鮮度をそこなう原因である場合が多い。切り花のエチレン発生を抑える化学物質が鮮度保持に使われている。

花と緑の時代である。生活環境の植物による美化や緑化が求められている。花をいつくしむ心を育むとともに、その心を充たすに足る花を創出することが必要である。新しい生命の科学が、花を育てる技術を次々に前進させている。

（あさひら ただし）

歌道における花

教養部教授 浜 田 啓 介

歌人・家系・伝授、歌学書の記述、本歌取り・懸詞など、そういうことを言わないで、歌道の入門を兼ねて、歌道における花を講じてみることにする。

歌道とは、古来の和歌全体ではなく、平安末に歌の学が成立して以来の、中世を中心とした和歌の美であり様式である。但しその美は溯上って古今集を源とするので、ここでは勅撰集時代の歌の美と様式という程の意味に用いることにする。

花を主題とする、歌道における花の美とは（時鳥とか露とか他のものを主題にしても同様だが）、幾百千人の歌人が幾百年を経て作りあげた、多くの心や景致や詞の複合体として、球のような一つの大きな美のかたまりである。歌人には何人もの個性と天才を含む（それは歌道の草創期に出現した）のであるが、にもかかわらずその球体は、かかる天才の苦心の創造をもその一部に包み込んでしまっ、全体としては一つの球体になっている。この球体を理解しなければ幾千首の花の歌は理解も評価もできず、逆にこの球体を把えることによって、総ての花の歌は理解と評価をなし得ると言っても過言でない。その球体を把握するのは、古来の歌を通してたどる事によってのみ可能である。歌人たちは、このかたまりの割れ目や欠けたところを少しづつ塞いだり磨いたりすることをして、いよいよ全体を球形に仕立てたのであって、一人づつ自分の球を作ったのではない。だから、詩に個性や個的な魂を求める立場からすれば、大多数の歌はその基準から外れ、新鮮でないといわれることになる。一つ一つの歌については、よしそうであっても、その球体の美は、大きな美しい貴いものなのである。個々の詩が、全体の詩美の一部になっているのみ存在し得る詩の世界、このような例が他にあるかどうかは知らないが。

その具体的な様相を、「花を雲と見る」という事、それは重要な景致の一つとして球体の一部を占めるが、それを例にして迎ってみる。その他にいかなる心や景致が、花に関する歌道の美を構成するものであるかを分析することが可能である。花を待つ心、花に心をなやませること。花を尋ね求めること、花を飽かず眺めて日暮に至ること。夢の中にも花を見ること。花が咲けば人が訪ねて来り、花が散れば人が訪れなくなること。空・風・霞・雲・袖・枕などが花の香によって匂うこと。桜は、雲であると同時に、雪であり、浪であり、瀧である。磯山の桜。松間の桜。故郷の桜。夕陽・入相の鐘と桜。月と桜。散るのを風が誘惑するのだと見る。散るのを苦にして風をいとうこと。花との別れを惜しむ心。しかしいづれ散るのが定めであると思うこと。自分の老境の心を花に投入して、憐み合うこと。後何年花を見ることができのだろうかという感傷、などである。これらがかかわり合って、全体の「歌道における花」の美をなしている。そして、その全体の軸になるものは、「花を愛づる心」である。この心を除きこの心にそむいて歌道の花は存在しない。

江戸時代に、多くの新味が出されたが、なお大局的にこの歌道の花の美を外れることはできなかった。江戸時代は、長大な過渡期であった。明治以後の歌人には、歌にせずには居られない我が心が歌道の外に、一人一人の中に確立し、春には花を愛づるものだという、歌道の約束を放棄するに至るのである。

（はまだ けいすけ）

＜栄 誉＞

宮崎市定名誉教授、満田久輝名誉教授 が文化功労者に選ばれる

このたび、宮崎市定名誉教授、満田久輝名誉教授が平成元年度文化功労者に選ばれ、11月6日、国立教育会館で顕彰式が行われた。

以下に両氏の略歴、業績等を紹介する。

宮崎 市定 名誉教授



宮崎市定名誉教授は、明治34年8月20日、長野県に生まれた。大正14年3月、京都帝国大学文学部史学科を卒業し、第六高等学校教授、第三高等学校教授を経て、昭和9年12月本学文学部助教授、同19年5月教授に

なり、東洋史学第二講座、ついで同第一講座を担当した。昭和22年4月文学博士の学位を授与され、同25年9月から翌年9月まで文学部長、同34年11月から翌年10月まで分校主事をつとめ、同40年3月停年退官、同年4月京都大学名誉教授の称号を授けられた。その間にパリ大学、ハーバード大学、退官後にハンブルグ大学、ボッフム大学の客員教授を歴任、昭和52年フランスのソシエテ・アジアティークの名誉会員に選ばれた。さらに昭和46年11月勲二等旭日重光章、同58年12月京都府文化賞の特別功労賞を授与された。

同名誉教授の学問業績は、東洋史学を研究領域とするが、その重点は中国史にある。その研究の基軸は官吏登用制度や官僚機構などの政治制度史にあるが、そのほか経済、社会あるいは思想、文化の広汎な領域を含み、対象とする時代も古代から近代に至るすべての時代にわたっている。その実証的で独創的な研究は、それらが発表されるごとに学界に大きな影響を与えてきた。さらにその研究は中国史にとどまらず、東南アジアから西アジアに及ぶアジア全域にわたっており、他人の追従を許さぬ規模雄大な学問体系を築き上げた。

中国の政治制度史の研究において、同名誉教授が先ず取り上げたのは、中国官僚制の本質を解く鍵ともいえる科举制度であり、その成果は『科举』として刊行され、その制度の具体的なすがたが初めて明らかにされた。ついで科举以前に遡って、『九品官人法の研究』を著し、漢代から唐代に至る高級官僚登用制度の実態を明確にした。この業績に対して、昭和33年5月、日本学士院賞が授けられた。このほか数多くの、多方面にわたる論文は、『アジア史研究』5冊、『宮崎市定アジア史論考』3冊におさめられている。後者に対し

て、フランスからスタニスラス・ジュリアン賞が授与された。中国史を通観することにも力を注ぎ多くの論著を著したが、なかでも『中国史』上下は、長年の研究成果が凝集された代表的著作であり、中文訳されて海外でもよく読まれている。

以上のような輝かしい学問業績がこの度の榮譽をもたらしたのであり、まことに喜ばしいことである。
(文学部)

満田 久輝 名誉教授



満田久輝名誉教授は、大正3年5月27日生れ、昭和12年京都帝国大学農学部農林化学科を卒業後、同年3月本学農学部副手、同13年同助手、同18年本学化学研究所講師、同19年同助教授、同27年同教授を経て、同

30年本学農学部教授（栄養化学講座担任）に就任し、同53年停年退官された。引続き5年間甲子園大学学長を務められた後、財団法人環境科学研究所理事長・所長として現在まで研究に精励されている。また、昭和58年より日本学士院会員として活躍され、特に同60年には英国学士院への代表派遣員として招待講演の任を果たされた。

この間、同名誉教授は、多数の優れた人材を育成されるとともに、栄養化学、食品工学、酵素化学、植物生理化学の研究を遂行されたが、研究面では、ビタミンの植物生理化学的研究、米の栄養・食品工学的研究、タンパク食糧資源の開発、栄養・食品に関する基礎研究、食品備蓄に関する研究等が中心となっている。特に、植物中におけるビタミンB₂の生合成機構の解明、白米の各種栄養強化に関する研究等は国内外で高く評価されている。更に、冷血動物の冬眠中の呼吸に関する研究から着想を得て、タンパク質と炭酸ガス間の相互作用により空間体積が減少するという原理を活用することにより、プラスチック袋による穀類の休催眠密着包装法を開発された。この研究は動物にも応用され、活魚の休催眠を始め、代謝速度の人為的調節にまで発展している。

以上の功績により、第1回科学技術庁長官賞(1959)、第1回日本栄養・食糧学会賞(1962)、日本ビタミン学会賞(1963)、国際食品科学工学会パブコック・ハート賞(1971)、同学会国際賞(1974)、日本学士院賞(1980)、紫綬褒賞(1980)、アメリカ化学会農芸化学・食品化学賞(1981)、勲二等旭日重光章(1985)、アインシュタイン特別名誉科学賞(1986)等を受けられた。また日本栄養・食糧学会長、日本ビタミン学会長、FAO/

WHO/UNICEF 合同タンパク質諮問委員会委員、第10回国際栄養学会組織委員長、第5回国際食品科学工学会議会長を歴任されるなど、国際学術交流の推進、斯学の発展に対しても重要な貢献をされている。

このたび、以上のような多大の業績により文化功勞者として顕彰されたことは誠に喜ばしいことである。

(農学部)

＜部局の動き＞

—公開講座—

木材研究所・農学部

「木の文化と科学—木を楽しむ—」

木材研究所と農学部林産工学教室は、農学部附属演習林との共催のもとに、9月30日と10月7日の両日午前10時から午後4時まで、農学部附属演習林上賀茂試験地において、公開講座「木の文化と科学—木を楽しむ—」を開催した。この講座は毎年継続して実施しているものであるが、本年度は昨年度に引続き一般市民を対象として実施し、57名が受講した。

本年度は、とくに木材が生物素材としていかに豊かな表情を持っているかを知ってもらうとともに、木材が樹木として生きている姿を肌で感じてもらうことを主眼に、農学部附属演習林の協力を得て行った。第1日は生物素材としての造形美を中心に講義2題と実習を行い、第2日は樹木としての話題を中心とした講義3題と、上賀茂試験地樹木園の見学を行った。

それぞれのテーマ及び担当者は次のとおりであった。

第1日 (9月30日)

ミクロの構造と造形美	藤 田 稔
染木と造形	野 村 隆 哉
染木による張り絵実習	野 村 隆 哉
	瀧 野 真二郎
	加 藤 弘 之

第2日 (10月7日)

森林の働き	和 田 茂 彦
マツ類とその歴史	大 畠 誠 一
松枯れ—マツクイムシ	古 野 東 洲
樹木園見学	古 野 東 洲

大 畠 誠 一

上 田 晋之助

(木材研究所・農学部)

医学部附属病院

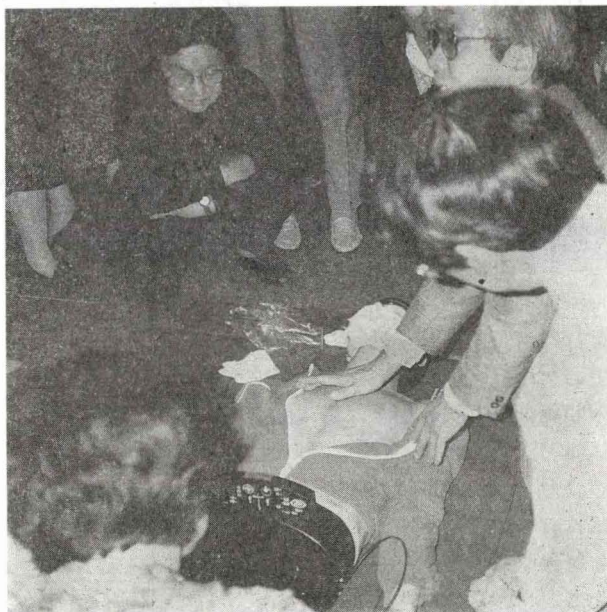
「心臓病長生き講座」

医学部附属病院では、去る10月7日から10月28日まで4回にわたり、毎週土曜日の午前10時から午後1時まで臨床第一講堂において、公開講座を開催した。

本講座は、現在日本人の死因の第2位である「心臓病」を主題に、長生きのコツを食事、生活、救急処置等の面から、分りやすく解説した。

受講者は、95名であった。

なお、講義題目・講師は次のとおりであった。



医学部附属病院公開講座における救急蘇生法の実習風景

動脈硬化とコレステロール

(浜松医科大学)

食養生の実際と調理のコツ

塩分と心臓病

減塩料理の実際と料理のコツ

酒, タバコ, コーヒー

心臓病と運動

(医療技術短期大学部)

急に苦しくなったときは

誰にも出来る救急蘇生法

田 港 朝 彦

辻 万寿美

内 田 宏 美

前 田 圭 禧

下 西 久美子

神 原 啓 文

桜 井 恒太郎

新 宮 興

(医学部附属病院)

<紹 介>

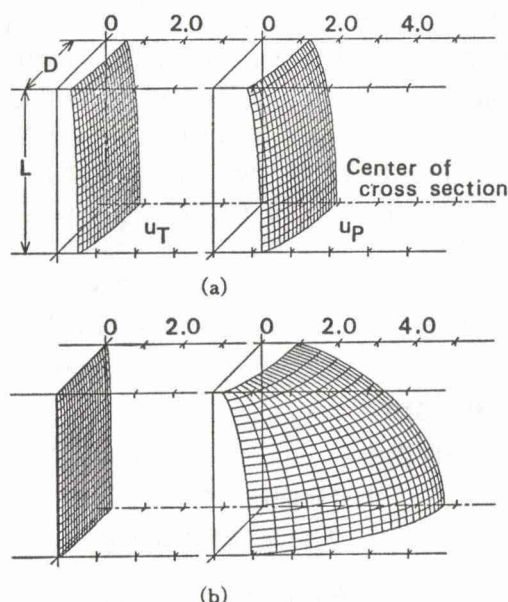
工学部航空工学教室

航空工学教室は、第二次世界大戦中の昭和17年3月に新設され、昭和19年9月に最初の卒業生を送り出した。しかしながら、終戦により航空機の製作とその研究が禁止され、これに伴って、昭和21年に航空工学教室は廃止され、応用物理学教室が新設された。その後、航空機の生産と研究の禁止が解除され、昭和30年に航空工学教室が再発足し、現在に至っている。

航空工学並びに宇宙工学は非常に広い範囲の研究・開発を含み、常に先駆的・独創的なものが要求される。このような要請の下で、大学における教育・研究組織としての効果を挙げ、社会のニーズにも応え得るために、本教室では現在及び将来において幅広い応用と発展が考えられる基礎的教科・課題に重点を置いた教育・研究が行われている。

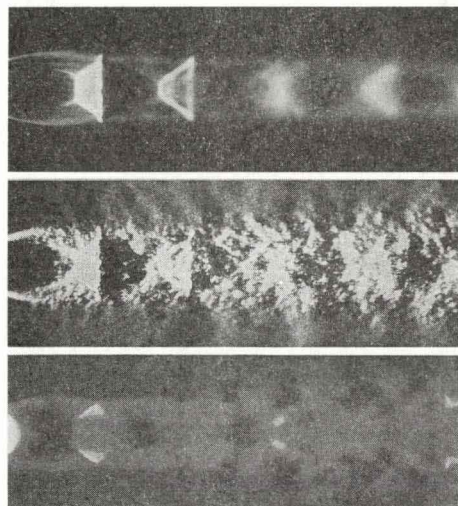
航空工学教室の6つの講座における研究内容は以下の通りであるが、学術的価値の高い基礎的研究を企図したものが多く、また、国際的交流が深いことにも特徴がある。

流体力学講座：流体の流れに関する問題の研究を行う講座であり、近年は分子気体力学の研究に主力を注いでいる。宇宙航行等における低圧気体の問題を取り扱う場合は微視的立場に基づく分子気体力学によらなければならない。本講座ではこの分野の発展初期よりその研究を行い、低密度気体特有の現象の解明、高度にあるいは軽度希薄な気体を取り扱う一般的方法や全希薄度を対象とする新しい数値解法の開発と応用等新しい分野の建設に努力している。



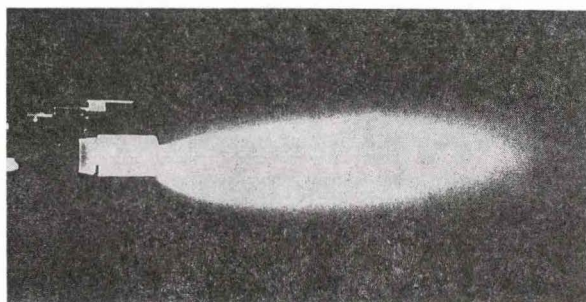
方形断面管を流れる低圧気体の Poiseuille 流 (U_P) と熱遷移流 (U_T) の流速分布：(a) 高度に希薄な気体、(b) 軽度に希薄な気体

空気力学講座：本講座では、数値流体力学の手法を用いて、回天流体の流れを調べている。この種の流れは、重力、回転、気体の圧縮性等の影響をすべて受けるので、数値流体力学的手法の適用限界を知る上で格好の研究テーマである。また、重力を及ぼす天体に働く抗力の計算、連星系内の流れに出来る渦巻き状の衝撃波、超新星の爆発による流れの3次元の微細構造、回転する恒星内の子午面流れの時間的振動等、天文学的にみても興味ある結果が次々に明らかにされている。



ジェットノイズ発生メカニズムを解明した写真とそのグラフィックシミュレーション

推進工学講座：大気中や宇宙空間における飛翔体の推進に関する研究を行う講座である。これには、特殊な環境・条件における高度なエネルギー変換技術と、それに伴う多様な作動流体の挙動に関する研究が要求される。このため、化学反応を伴う高温気体、電磁場と相互作用するプラズマ・液体金属、種々の圧力・温度条件における混相流体の基本特性、また、これら流体のノズル流やジェット流など、推進に関連した基本的流れの問題が幅広く研究されている。実験には衝撃風洞、プ



プラズマ風洞を利用した MPD スラスターの試作・実験

ラズマ風洞、混相流ブローダウン装置などが用いられている。

構造強度学講座：航空機、宇宙構造物などに関連した構造解析及びそれらに用いられる各種材料の強度に関する教育と研究が行われている。近年は衝撃を受ける構造物の動的応答、高ひずみ速度下での材料強度など、動的強度に関する研究が重点的に行われている。対象とする材料も従来の金属から複合材料、セラミクスなど、航空宇宙用として注目されている素材に広がっている。写真は

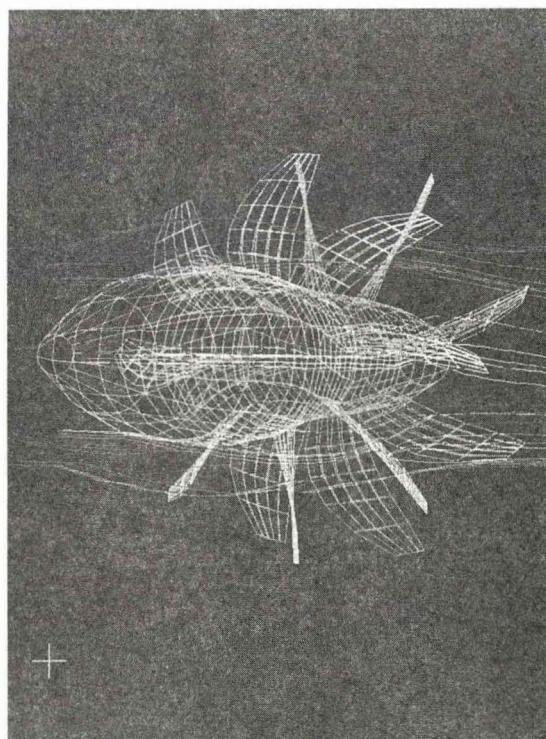


CFRP 積層板の超音波探傷例

衝撃を受けた CFRP（炭素繊維強化積層板）の内部に生じた剝離の超音波探傷例である。

振動学講座：航空宇宙工学での対象システムの複雑化、大規模化に対応して、従来からの振動学の他、制御工学及びシステム工学の教育と研究が行われている。なかでも、柔軟宇宙構造物の振動制御、大規模システムの信頼性・安全性を向上させるための方法論、人間と機械・システムとのよりよい調和を求めるヒューマン・インタフェース、人間の意志決定を効果的に支援するコンピュータ・システムなどの研究に重点が置かれている。

航空機力学講座：航空機の安定性、操縦性などに関連の深い諸問題を扱っており、航空機力学、非定常空気力学、制御理論などの研究を行っている。航空機が突風に遭遇したときの動応答、またこの突風荷重を制御して軽減するための研究、柔軟宇宙構造物の振動制御の研究を行っている。さらにブロップファン（高速ターボブロップ）の空力特性を数値流体力学的手法を用いて解析している。当教室の風洞実験室は宇治構内にあるが、現在はさまざまな表面の流体摩擦抵抗を調べる実験を行っている。（工学部）



二重反転ブロップファンまわりの流れ場のコンピュータシミュレーション

学 術 講 演 会 の 開 催

平成元年度秋季学術講演会を下記のとおり開催いたします。本学教職員・学生の来聴を歓迎します。

記

日 時 平成元年12月6日(水) 午後3時から
会 場 法経第二教室
講 師 日高 敏隆(本学理学部長)
演 題 “動物は何を目指すか”

講師略歴

1952年東京大学理学部動物学科卒業。1959年東京農工大学農学部講師，助教授を経て1965年教授に就任。1975年京都大学理学部教授(動物学教室)に就任。1989年4月から理学部長。理学博士。

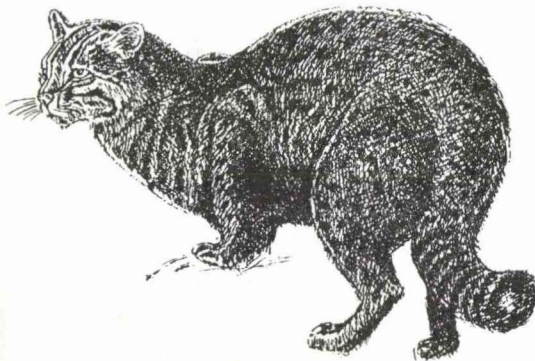
同氏は，学生時代から昆虫ホルモンの研究に取り組み，大学院時代にアゲハチョウの蛹の保護色発現に関わる新しいホルモンを発見，その分泌機構を解明して，昆虫の色彩適応の研究に大きな話題を投げた。農工大に移ってからは，昆虫の行動の研究に着手，蛾の繁殖行動における性フェロモンが，従来信じられていたのとはまったく異なる働き方をしていることを明らかにした。この研究結果によって，害虫防除のためのフェロモンの利用方法が世界的に変化することになった。

その後，同氏の研究は昆虫ばかりでなく，さまざまな動物行動に広がり，若い研究者たちとともに，次々と興味ぶかい成果をあげている。

1982年には日本動物行動学会を設立し，国際学術誌“Journal of Ethology”を創刊。創立以来，同学会の会長として，日本の動物行動学発展の中心的存在であり，また国際動物行動学理事会の常任理事として活躍している。

著書，訳書もきわめて多く，内外の読者に大きな影響を与えてきている。

(学生部)



イリオモテヤマネコ

能 楽 鑑 賞 会 の 開 催

本年度能楽鑑賞会を下記のとおり開催します。本学教職員・学生の来場を歓迎します。

記

日 時 平成元年12月8日(金) 午後6時開演
会 場 京都観世会館 京都市左京区岡崎円勝寺町44(東山仁王門を東へ約300メートル)
演 目 狂言 「清水」 茂山千五郎 松本 薫
能 「国栖」 片山九郎右衛門 片山 清司 谷田宗二朗 他

入場無料

(学生部)

写真集企画委員会からのお願い

写真集企画委員会では、かねてより本学の歴史に関係する写真等の資料を収集しており、教職員・学生の方々にご協力をお願いしております。(京大広報No.354 参照)

ご協力いただける方は、庶務部広報調査課(内線 2070, 2073)までご連絡くださるようお願いいたします。

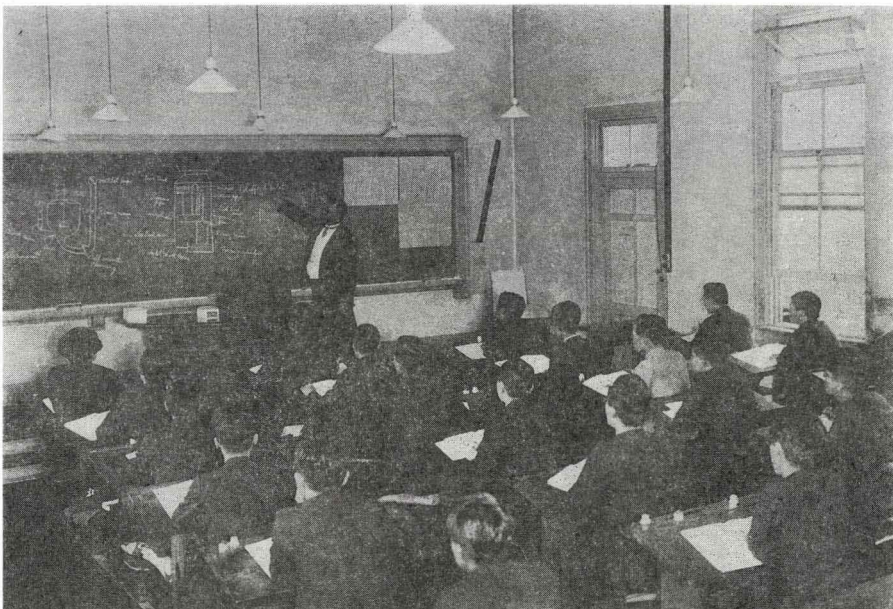
工学部機械工学教室授業時間割—工学部機械工学教室卒業アルバム(昭和15年3月卒業)より—

<工学部提供>

土	金	木	水	火	月	曜時
機械力学 長尾	機械設計法 西原	材料力学 西原	蒸気原動機 菅原	鉄鋼材料 澤村	空気力学 藤本	午前八至一〇
機械力学 河本	電気工學一部 本野	水力原動機 及脚筒田伏	内燃機 菅原	内燃機 菅原	蒸気及蒸気機 菅原	午前〇至一二
	機械工學實驗 長尾	材料工學實驗 河本	材料力学 菅原	材料力学 菅原	機械設計製図 第二部 菊川	午後一〇至四

土	金	木	水	火	月	曜時
機械設計法 佐々木	数学解析特論 松本	力学 玉城	材料力学 西原	数学解析 松本	測定工學 佐々木	午前八至一〇
材料力学 西原	水力學 田伏	熱力学 菊川	機械製造法 菊川	材料工學 西原	水力 田伏	午前〇至一二
	機械設計製図 第一部 河本	工作實習 菊川	熱力学 菊川	物理 小島	久世圖	午後一〇至四

土	金	木	水	火	月	曜時
鐵道車輛 山崎	金屬加工法 西村	化學機械 龜井	工場管理法 吉本	電氣理論 安藤	金屬材料 西村	午前八至一〇
燈房及冷凍 菊川	工場建築法 伊東	電氣工學三部 松田	航空機 佐々木	送風機 藤本	起重機運送機 南人路	午前〇至一二
内燃機 長尾	電氣工學實驗 藤本	工作機械 菊川	紡績機 藤野	船用機 田伏	機械設計製図 第二部 菊川	午後一〇至四



工学部大井教授の衛生工學講義風景—工学部土木工學教室卒業アルバム(昭和6年3月卒業)より—

<工学部提供>

日 誌

(1989年10月1日～10月31日)

- | | | | |
|-------|---|--------|--|
| 10月2日 | 京都大学春秋講義・月曜講義第1日（以後の日程は、23日、30日、11月13日、27日） | 10月18日 | 国際交流委員会 |
| 4日 | 京都大学春秋講義・水曜講義第1日（以後の日程は、18日、11月15日、29日、12月6日） | 20日 | アメリカ合衆国 Arkansas 医科大学 Dodd Wilson 学長ほか1名来学，総長及び関係教官と懇談 |
| 5日 | 連合王国 Sussex 大学 Leslie Fielding 学長ほか2名来学，学術交流に関する覚書交換及び総長に名誉理学博士号を授与 | 〃 | 薬学部創設50周年記念式典 |
| 〃 | スウェーデン王国 Nobel 財団 Stig Ramel 専務理事ほか6名来学，総長及び関係教官と懇談 | 21日 | 京都大学市民講座「はな」第1日（以後の日程は、28日、11月4日） |
| 6日 | 環境保全委員会 | 24日 | 文学部博物館秋季企画展「近世の肖像画」開催（12月9日まで） |
| 7日 | 医学部附属病院公開講座「心臓病長生き講座」（以後の日程は、14日、21日、28日） | 27日 | 附属図書館商議会 |
| 14日 | 故小山睦夫教授の原子炉実験所追悼式 | 28日 | 名誉教授懇談会 |
| 18日 | ドイツ連邦共和国 Hannover 大学 Hinrich Seidel 学長来学，総長及び関係教官と懇談 | 31日 | 評議会 |
| | | 〃 | 大学院審議会 |
| | | 〃 | 名誉教授称号授与式 |

(訂正)

京大広報 (No. 379) に掲載の山岡亮一名誉教授の随想について，以下のとおり訂正します。

＜訂正箇所＞	＜誤＞	＜正＞
左段上から10行目	昭和四十五年の八月	昭和四十六年の八月
左段上から11行・12行目	昭和四十六年の三月末日	昭和四十七年の三月末日

(お断り)

毎号掲載しております＜随想＞及び＜コラム＞は，本号は都合により休載します。